

油絵

絵にはエネルギーがある。
私は絵をみた人の心から生きる活力が湧き上がる
ような絵を描きたい。
力強さや楽しさを感じ、心弾むような。
だから私は強い色を好んで使う。
色にはエネルギーがあるから、
絵と対面した時にグワッと押し寄せる圧力を
感じさせられる。



「支え」

2022年1月
F15号キャンバスに油彩

3本の絵の具のみを使って描いた油絵。
混色と、下地を生かした描き方をした。
真ん中の人に寄り添う二つの人影は、真ん中の人自身である。
良いことも悪いことも、全部ひっくるめて
その人を支えてくれる要素になるという意味を込めた。

「パプリカ」

2022年5月
F6号キャンバスに
油彩



パプリカをしっかり観察し、描写することを心がけた。

描写に加え、イメージも追加してみた。



「静物」

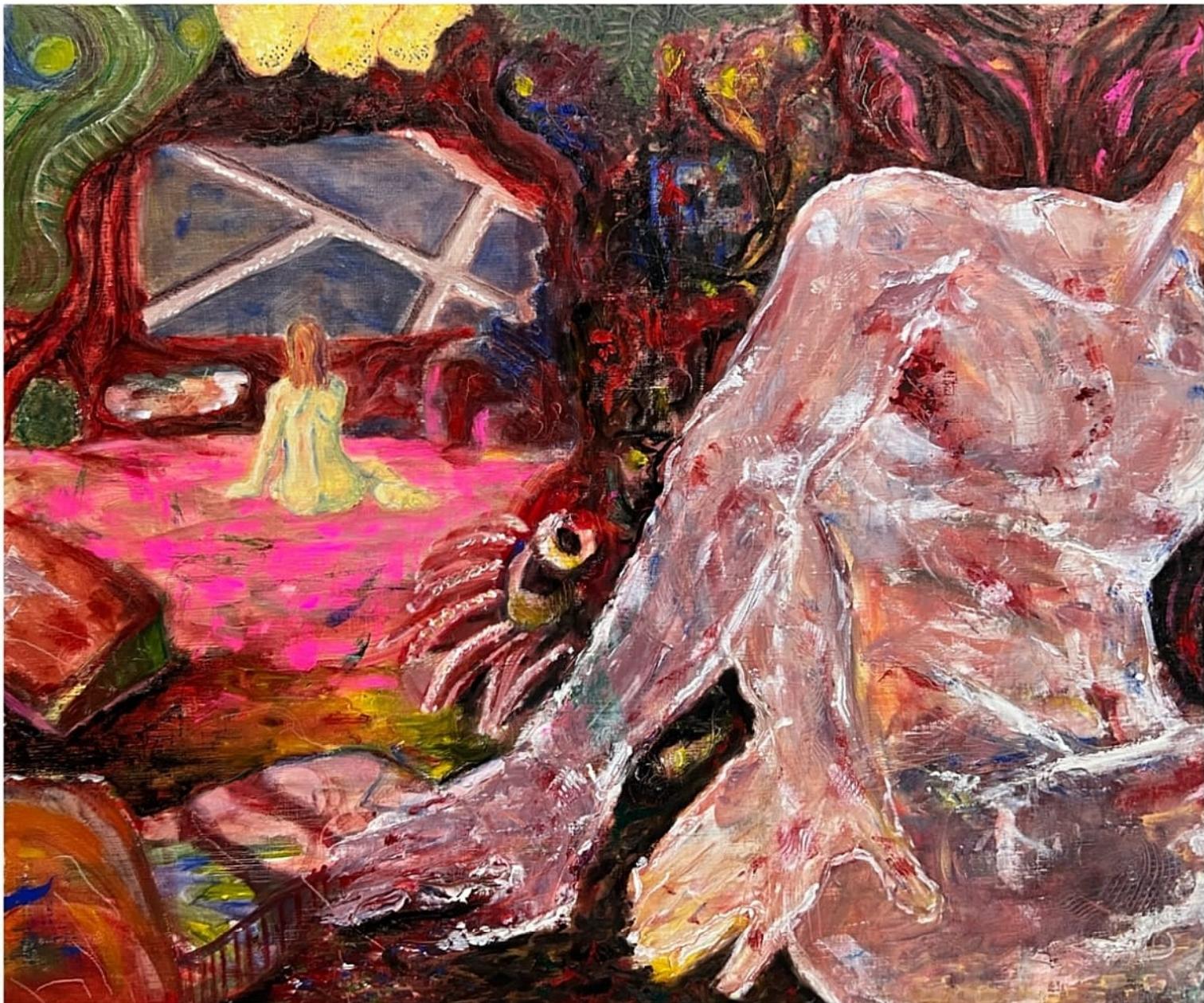
2022年6月
F15号キャンバスに
油彩



「そなちね」

2022年6月
F15号キャンバスに油彩

北野武の「ソナチネ」という映画
↓
に影響を受けたTempalayというバンドの
「そなちね」のMV
↓
に影響を受けて描いた作品。



「ふたり」

2022年8月
F20号キャンバスに油彩

一緒に居てくれる誰かを求めている感覚がずっとある。その誰かがどこに居るかはわからない。けど絵を描いてる時がその誰かが1番近くにいる気がする。



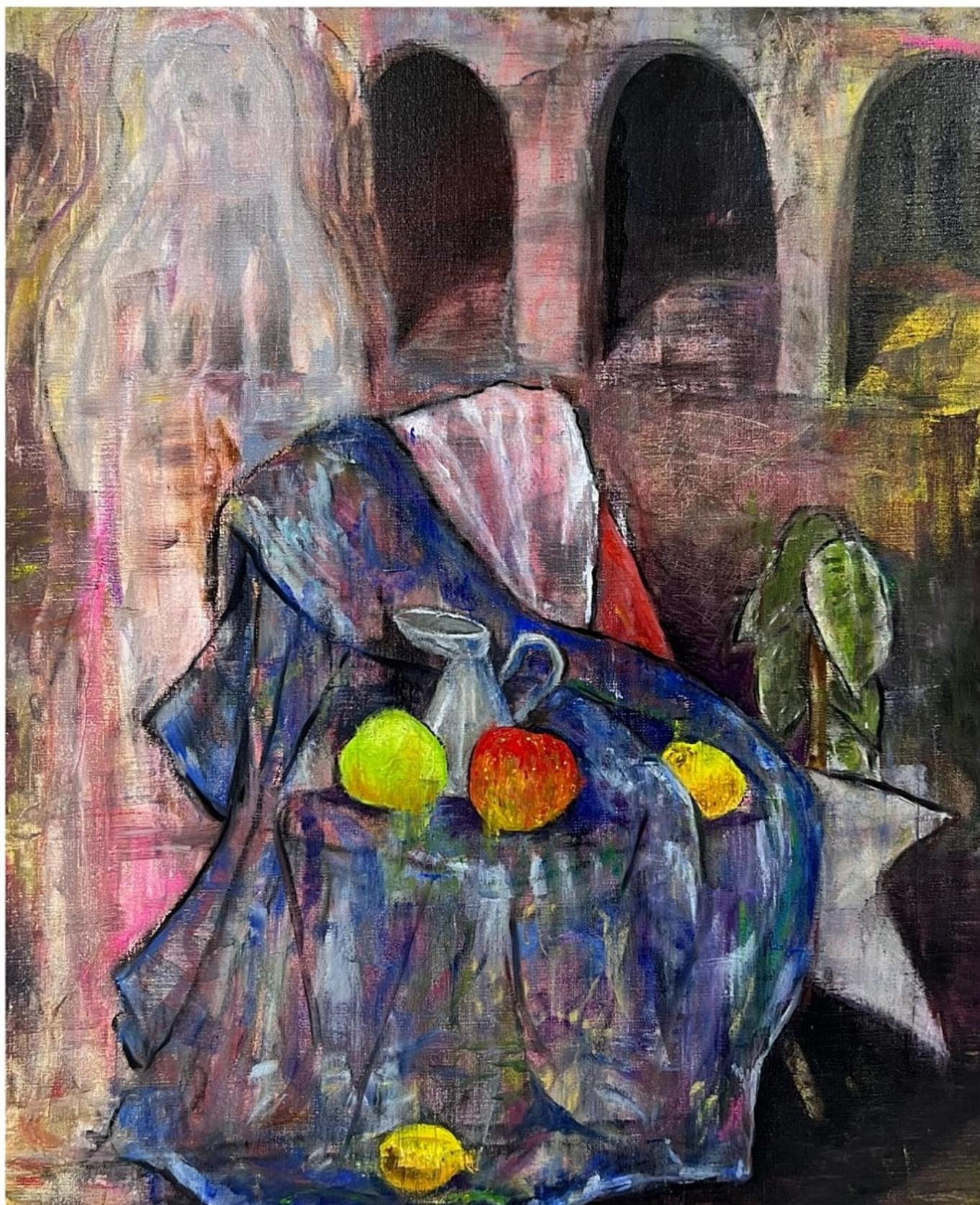
「夜明けの街」

2022年8月
F20号キャンバス
に油彩

「人物」

2022年8月
F15号キャンバスに
油彩





「静物と幽霊」

2023年5月
F15号キャンバスに油彩

静物を見た時に、椅子の後ろに誰かがいるような
気配がしたので、そのイメージを加えて描いてみた。
そもそも椅子というものは人が座るものだから、
置いてあるだけで人の気配を感じるもの
なのかもしれない。



「マスク」

2023年6月
F20号キャンバスに油彩

コロナ禍で全てが変わった。
人々は不安を抱え、社会は混乱し、
人がたくさん亡くなった。
コロナによって人々の温かみが薄れ、
人と人との心に壁が生まれてしまった。
しかし、今は少しずつ戻ってきているように感じる。
時の流れと、人々の努力によって。

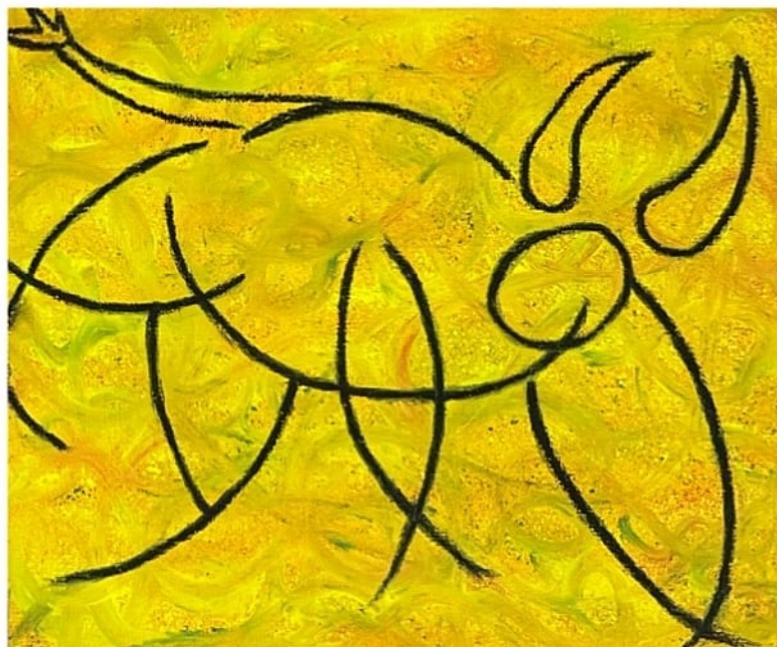
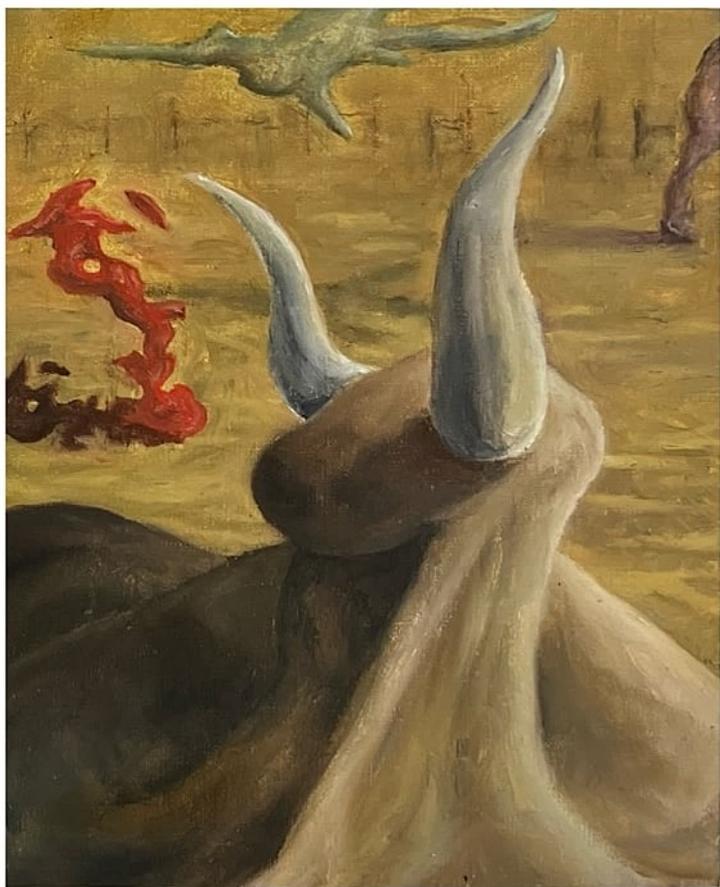
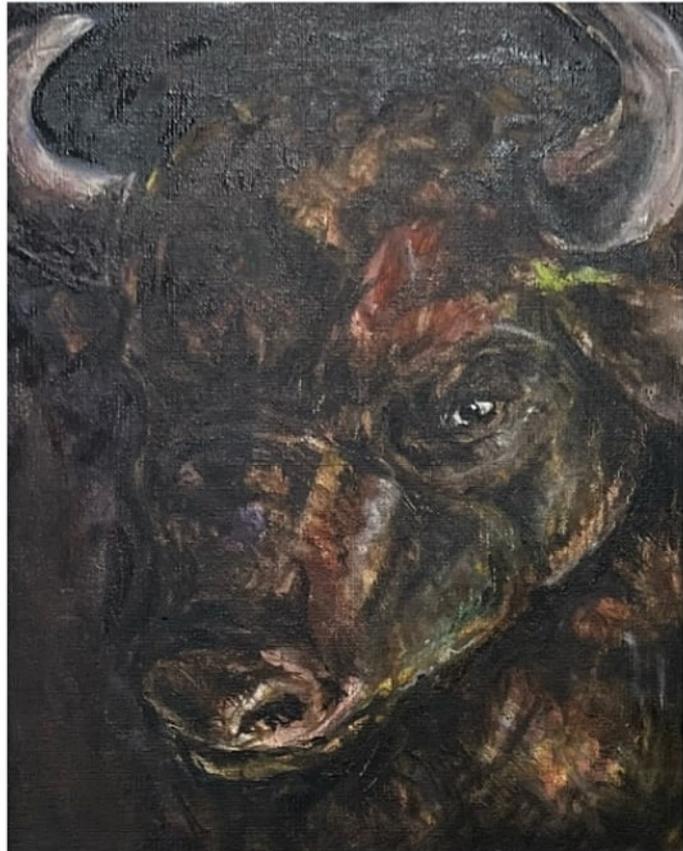
これから起こり得ることは誰にもわからない。
これから私たちはどう生きていくのだろうか。



「チョコレート工場」

2023年6月
F15号キャンバスにクレパス

クレパスだけで描いてみようと思い、
テレピンと筆を併用しつつ描いた絵。
油絵の具とは違った質感が新鮮でいい感じに
仕上がった。



「いろんな牛」

2023年7月
F15号キャンバスを四分割して
油彩、クレパス、木炭

ピカソや、ダリ、ラスコーの壁画などを参考にして牛を描いてみた。全く違う描き方をしてみるのは新鮮で楽しい。全然違うスタイルなのに、どの絵からも何となく自分らしさみたいなものが感じられるのも面白い。



「旅の思い出」

2023年9月
F20号キャンバスに
油彩



箱根旅行に行った時の景色を思い出しながら描いた油絵。
イマジナリーキャラクターがいっぱい居て賑やかな画面だ。



「逃走犯」

2023年9月
キャンバスパネルに油彩



「走れ！」

2023年9月
F20号キャンバスに油彩

荒野をがむしゃらに走る。
その先に何があるかはまだわからない。
けどとにかく走る。ポロボロになりながら。
時には休みながら。心が求める何かに向かって
走り続ける。



「熱感覚」

2023年10月
F15号キャンバスに油彩

小さい頃に高熱を出した時の感覚を絵にしてみた。
体がポワンポワンと脈打っていて、
力の強い巨人の手で、小さく脆いブロックを
積み重ねていくような奇妙な感覚があった。



「夜」

2023年11月
F20号キャンバスに油彩

家にある二人組の陶器の人形をモチーフに描いた作品。
街並みは絵本のようにメルヘンで優しい雰囲気満ちている。



「マグマ」

2023年11月
F6号キャンバスに油彩



「ピエロ」

2023年11月
F20号キャンバスに油彩

背景の絵の具を塗り重ねて、ピエロが仕事に対して感じている窮屈さ、息苦しさを表現してみた。道化師というのも、仕事だから、素でやってる人の方が少ないだろう。



「制裁」

2023年12月
F15号キャンバス
に油彩

ゴテゴテの絵の具と
色彩でパワフルな
画面を作ることを
意識した。

「熱湯」

2023年12月
F20号キャンバス
に油彩

ドローイングの
ような感覚で
描くことで、
描き始めの時に
感じる良さみたい
な物を残そう
としてみた。

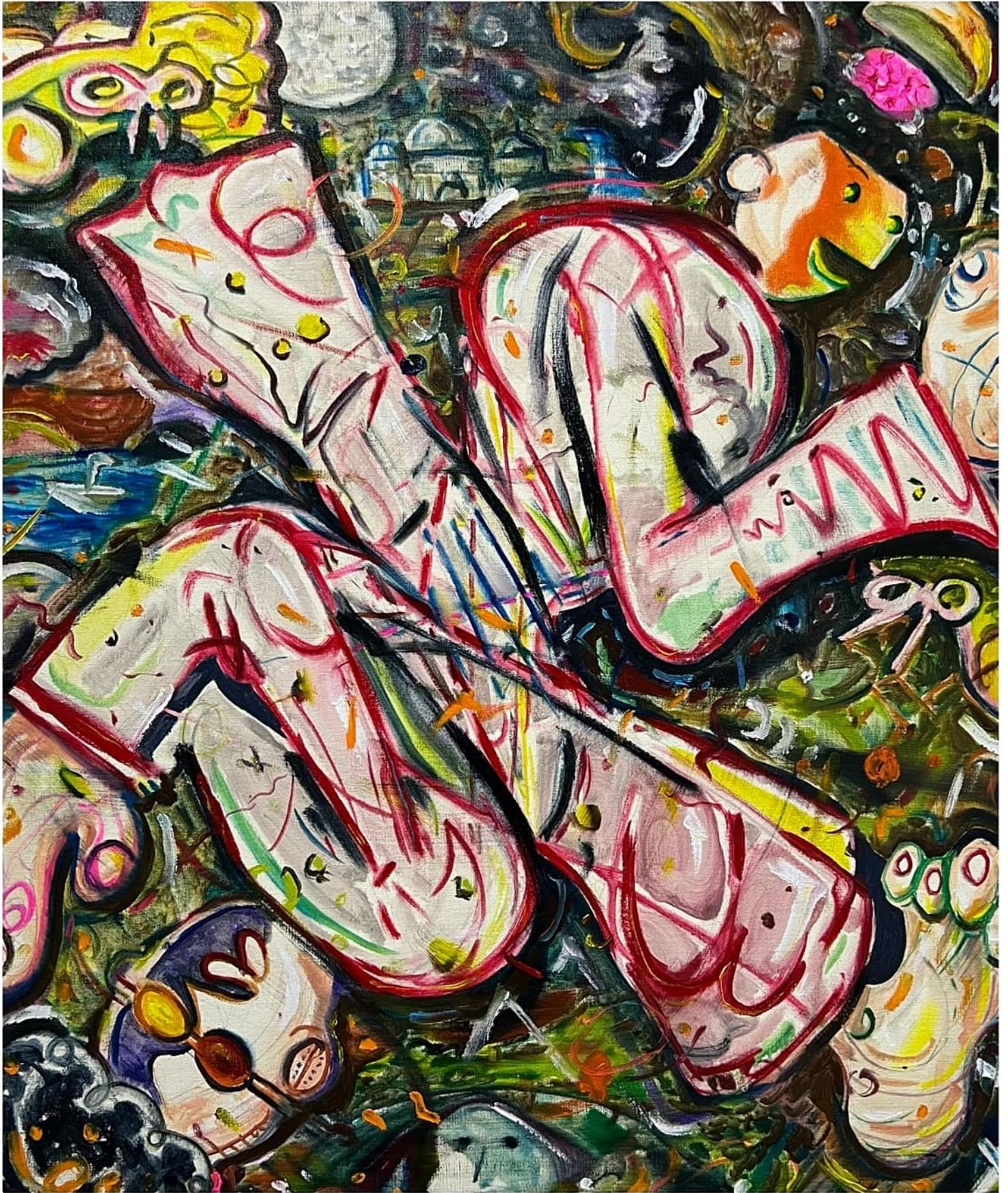




「荒野」

2023年12月
F20号キャンバスに油彩

「走れ!」と同じようなテーマで描いた絵。
このあたりから、ドローイングのような軽さと、
描き始めの時に感じる良さのようなもの
を残すことを意識して作品作りをするようになった。



「暴れん坊ふたり」

2024年1月
F20号キャンバスに油彩

横尾忠則の寒山拾得という展示をみて思ったのは、二人でワイワイやってるところを見ていると、こっちにもその楽しさが伝わってきていいなということでした。

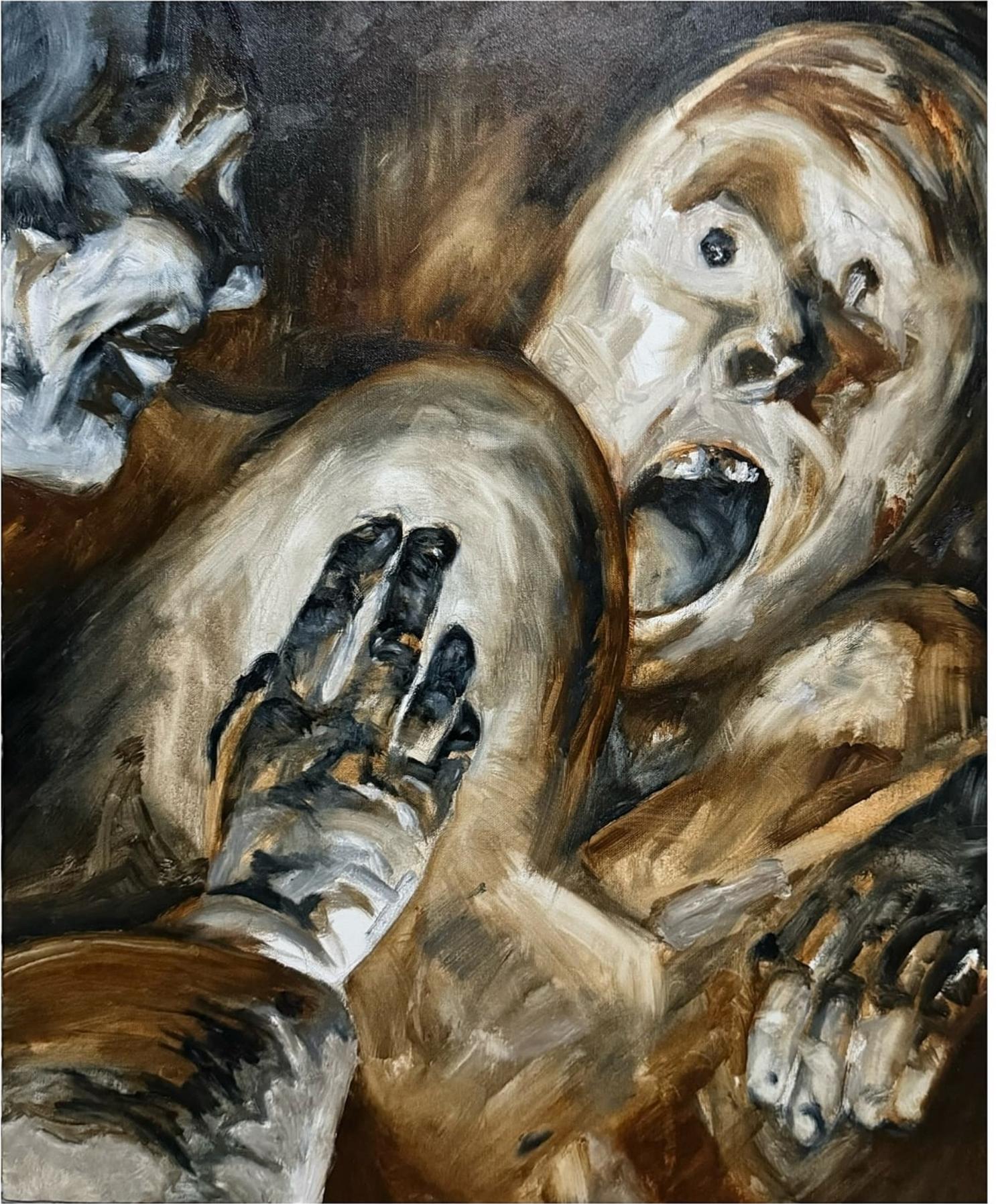


「ソウルメイト」

2024年1月
F20号キャンバスに油彩

これは中園孔二という作家から影響を受けて描いた絵。
中園孔二の考えと絵が私は好きだ。
彼はソウルメイトを求めている。私も絵の中の
人たちにそれを投影している節がある。

彼の描く絵はドローイングのような
軽さがある、それは原初の感動のような
ものを私に与えてくれる。



「びっくり」

2024年10月
F15号キャンバスに油彩

毎回同じスタイルだと少し飽きるから、たまにはガラッと絵柄を変えてみる。普段とは全然違う方向に絵が出来上がってく感覚が新鮮で楽しい。



「」

2024年2月
F20号キャンバスに油彩

確かこの絵は多摩日に落ちた後、藝大の一次を終えて結果を待っている時に描いた絵だ。当時はこの絵に特に思い入れもなかったが、今見ると当時の苦しみが伝わってくるいい絵だと感じる。もう後が無いという焦燥感。結果を待つことしかできない不安。今この絵は多分描けない。その時にしか描けない絵だ。

絵を描く上で大切なこと

これは絵に限った話ではなく、全てに共通すること。

自分の真似をしすぎないこと。

上手くいったからといって、次の作品も同じように描こうとしてはいけない。

表現が先細りしてつまらない絵になっていってしまう。
そしてそれは自分では中々気付かなかったりするから厄介である。

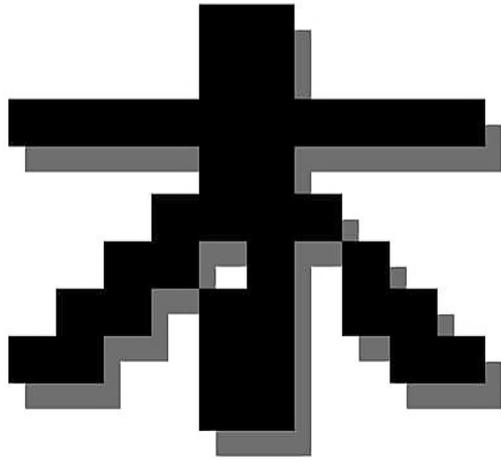
大切なのは「新しいものを取り入れていく」こと。

注意して欲しいのは、自分の中での「新しいもの」なので、過去のものや、知らなかったものも新しいものになる。

模写や展示を見たり、自然を見たり歩いたりして刺激を受ける。人のアドバイスを取り入れてみる。

そうすることで自分の絵は新鮮さを失わず、常にワクワクをもたらしてくれる。

そうやってくと巡り巡って
過去の自分が新しいものになって
今の自分の前に現れることもあるから面白い。



の実験

今年は総合型選抜。
油絵科の一般受験におけるキャンバスに油彩で描くという制約が無くなったので、試しに木に描いてみたのだが、木という支持体が私の描き方や考えととても相性がよかった。

ここからは木を用いた作品作りの
試行錯誤の様子を載せていく。

「人並み」

2025年4月
715×445の板に
油彩



私はキャンバスよりも、木とか、ダンボールとかに
絵を描く方が好きだ。絵の具がスッと染み込んでいく感覚がいい。
あとは、キャンバスよりも気負わない感じがして描きやすい。

見る人にとって敷居が低くなり、より身近に感じられるような、
そういった作品の形態をこれから探っていこうと思う。



「たたずむ風景」

2025年4月
270×375の板に
油彩、ジェツソ

この絵が今の制作スタイルの原点だ。
版画に使った版木がもったいないと感じ、
木の方も作品として仕上げようと思い立ったのが始まりだった。
下の黒は油彩で、上の白はジェツソ。
木が油を吸い込むからか、ジェツソは剥がれてこない。
平たい彫刻刀で表面を削ったり、彫りで木の地を出し、
絵の密度を上げていった。
そしたら中々面白い画面が出来上がったので、
ここから色々試してみることにした。

いい表現は偶然から生まれる。

ちなみに版画の方は
木が油を吸ってしまったので
うまくいかなかった。





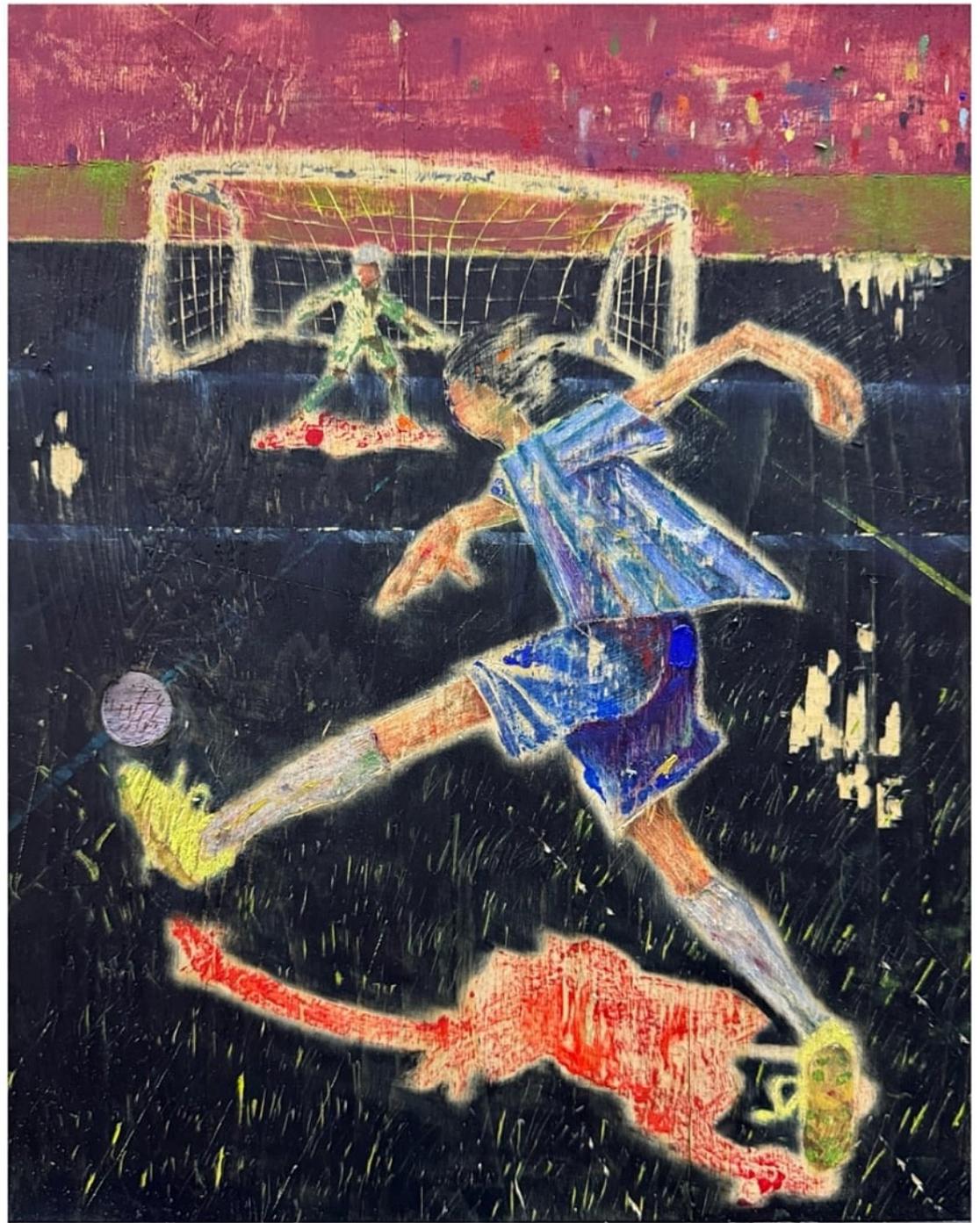
「夕焼け」

2025年5月
300× 270の板に油彩

少女の髪の毛の流れを彫りで表現できないだろうかと思い試してみた。
イメージした通りの感じに仕上げることができた。

「PKサッカー」

2025年5月
375×300の板に油彩



木の節をボールに見立てて描いた絵。

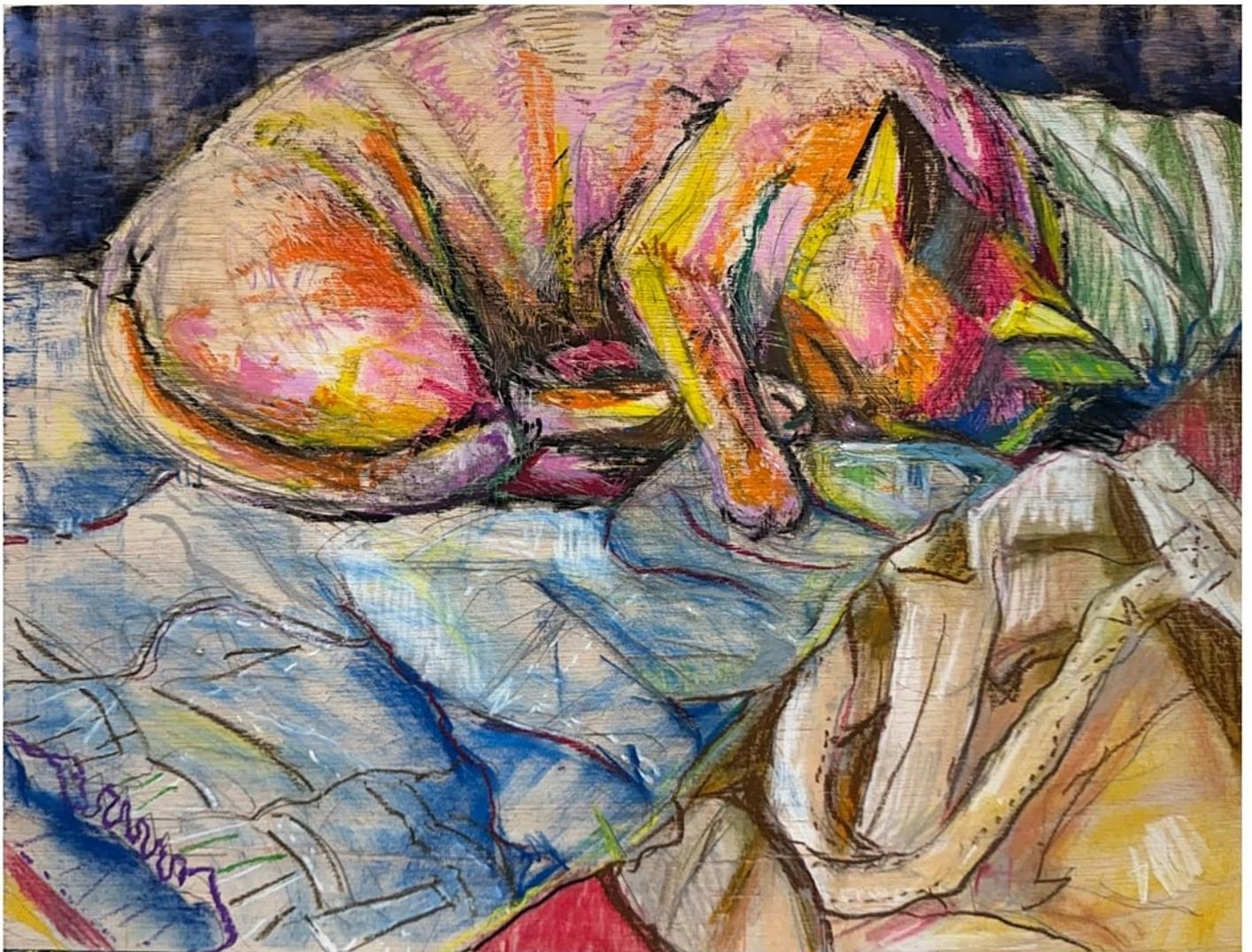


色版画のように、紙に描いたものを木に写してみたらどうだろうかという実験。いい感じの、独特の掠れ具合が出たと感じる。仕上げに少し加筆し、この作品は終わらせた。

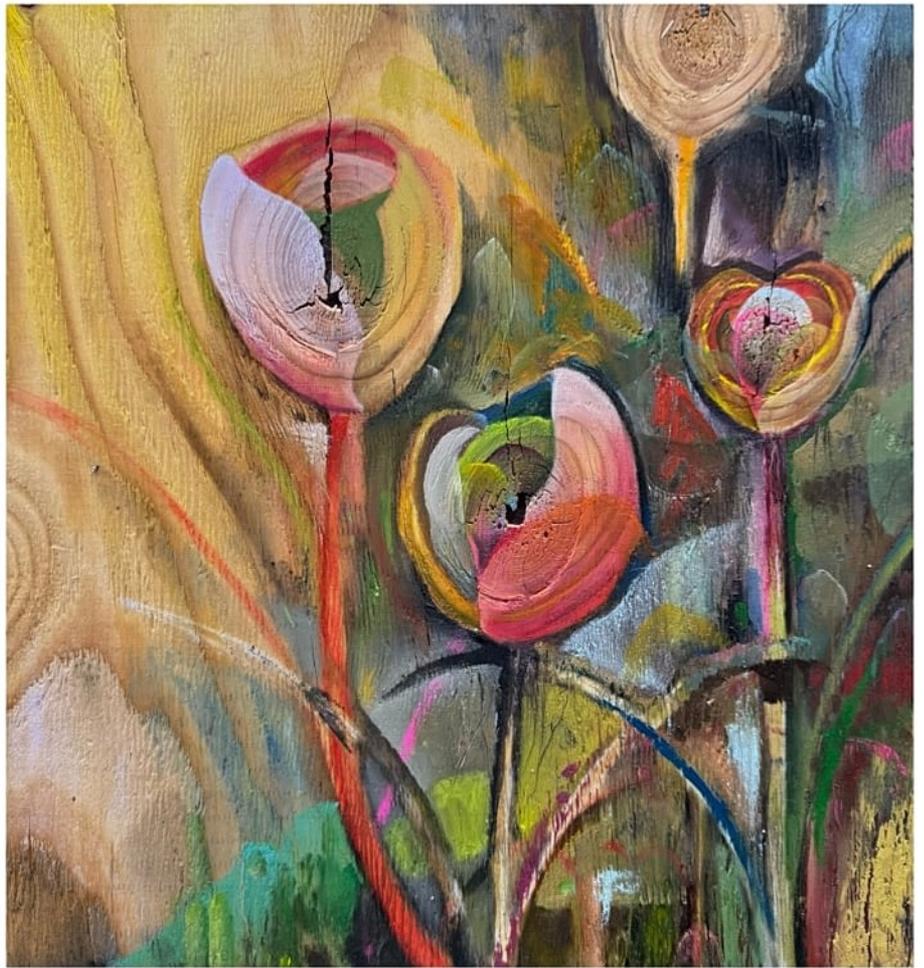


「ピンポン」 2025年5月
300×450の板に油彩
彫った所に色を加えてみた。

「眠るねこ」 2025年5月
365×475の板に
クレパス、バステル、メディウム
色々画材を使ってみた。



「花」
2025年5月
360×335の板に
油彩



「水玉」
2025年5月
305×450の板に
油彩



木目から着想を得て描いた作品。
具象と抽象の2枚。



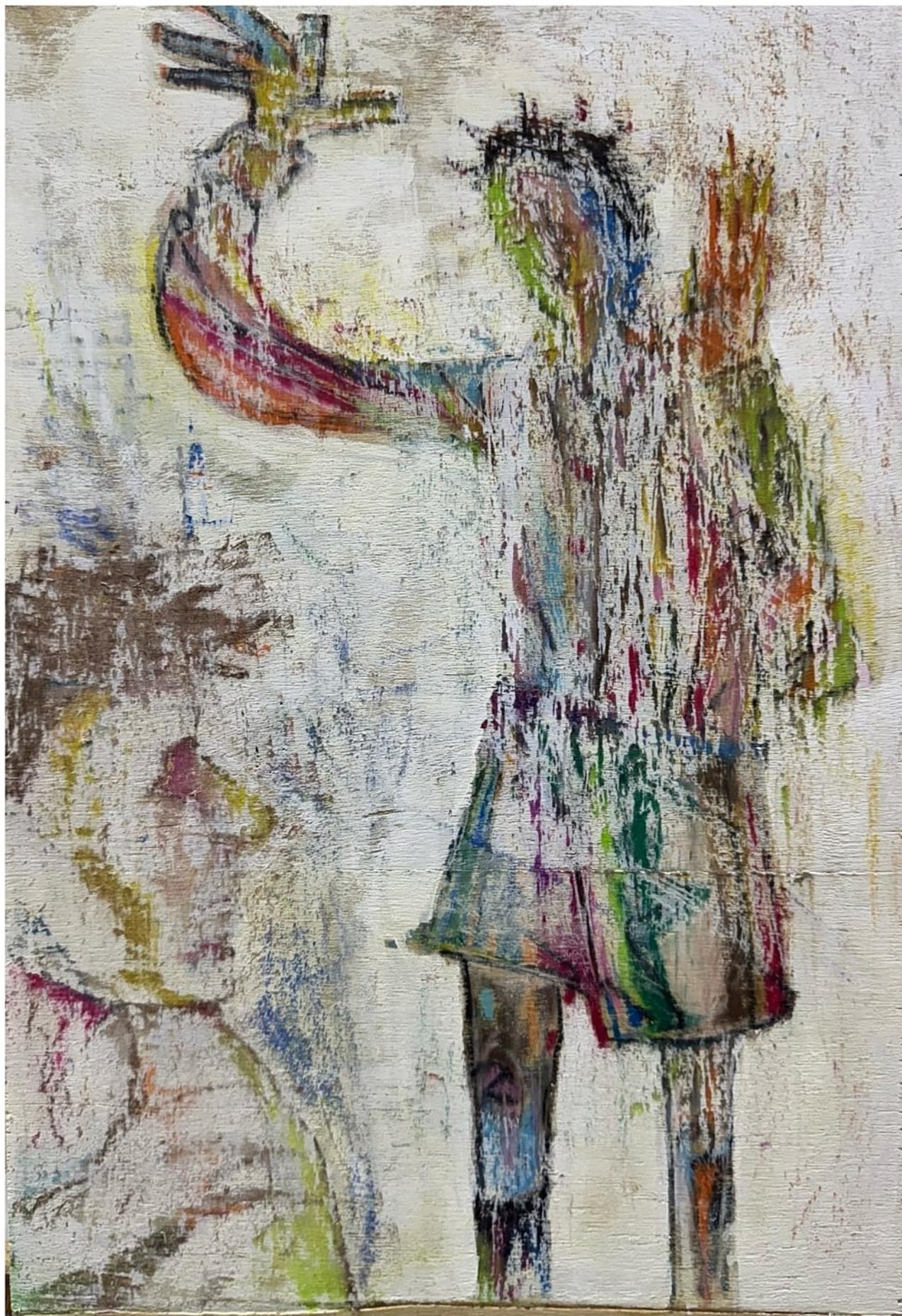
「たからさがし」

2025年5月
340×380の板に
鉛筆、ジェッソ、クレパス

広いコーナンの角にある端材置き場。
普通は気にも留めないような場所だけど、
私はここに来るとすごくワクワクする。
木によって色も模様も違う。来るたびに品揃えも変わってる。
浜辺で貝殻を探すような気分で楽しい。しかも、安い。
これはとてもありがたい。
どんな絵を描こうかと、夢が膨らむ。
だからここは私にとって夢のような場所なんだ。

「あぐり」

2025年5月
450×305の板に
クレパス、
ジェツソ



クレパスで描いた上にジェツソを塗り、
描いた部分をペインティングナイフで削ると
こうゆう古い壁画みたいな表情が生まれる。
ポイントは、木目が横向きであること。
そうするとクレパスがいい感じに掠れていく。

「風船と少女」

2025年6月
390×300の板に
油彩、ジェッツ

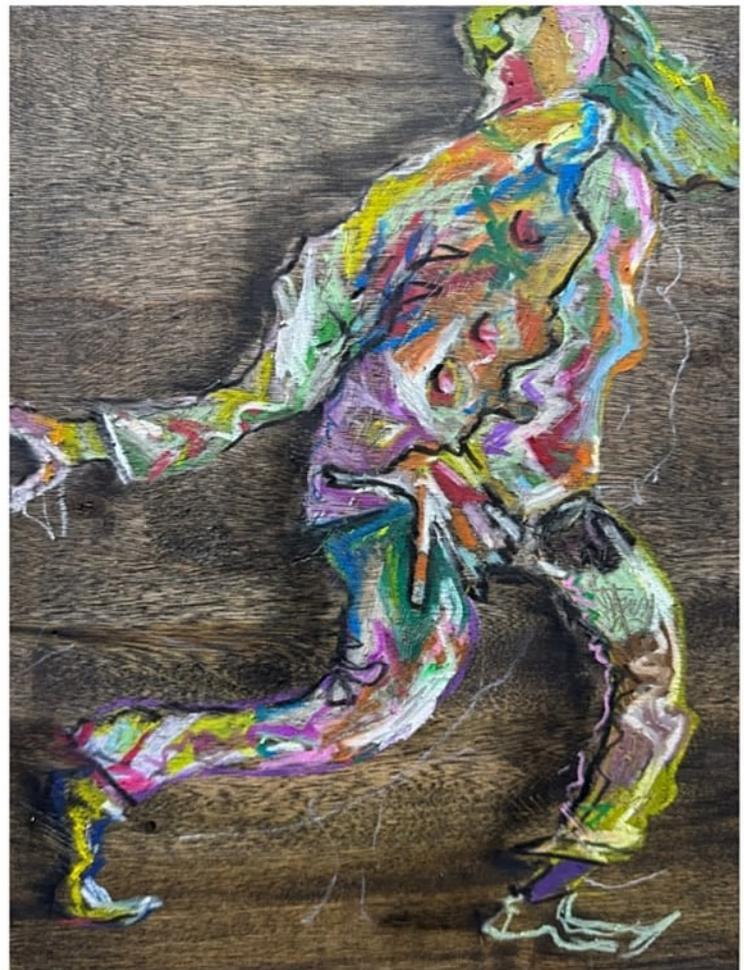
サザエさん48巻の表紙から
着想を得て描いた作品。
サザエさんの表紙は
結構オシャレだということに
最近気づいた。



「風」

2025年6月
340×255の板に
油性塗料、クレパス

コーナンで買った油性塗料を使って
背景を塗ってみた。木目がほどよく
残っていい質感が出た。





「さんぽ」

2025年6月
420×445の板に
クレパス、鉛筆

私はこの木の色味が好きだ。
心に安らぎを与えてくれる。
木の地肌を残すことで暖かみを感じ、
親しみを感じやすい絵になったのではないだろうか。
何気ない素朴な感じが、この絵のゆるさを
際立たせてくれている。

「談笑」

2025年6月
215×450の板に
クレパス





「ガジュマル」

2025年6月
F50号サイズの板に
油彩、ジェッソ

高校の沖縄旅行の時にみたガジュマルの木。
なによりもそのデカさに圧倒された。それに加えて
うねうねと絡み合う根が、なんとも不気味というか、カッコいいというか...
とにかく、あれと対峙したとき、感動もしたけど、
畏怖の念というか、色んな感覚が押し寄せてきて、
目には見えない何かを感じた。
人や動物にとって木は酸素も生み出してくれるし、とても大切なものだ。
けれど太古の生物にとっては酸素は猛毒だったらしいじゃないか。そう考えると
あの木の形がとてつもなく禍々しく見えてくる。悪魔のように思えてくる。
それがたまたま私たちにとって益になるだけだったというだけで。

私は自然の中立的な所が好きだ。
だから心惹かれるのかもしれない。



「風景」

2025年6月
910×650の板に
クレパス

一人の少女が行んでいる。
木目によって感じる空間は、
浜辺、砂漠、平原など、
見る人によってその姿を変え、
そこに少女とその人だけの物語が生まれる。



「緩和」

2025年6月
P40サイズの板に
クレパス、ジェッソ

絵の中の人は、読書をしているようにも、
演奏をしているようにもみえる。
彼は自分の時間を有意義に使い、リラックスしている。
彼の心は幸せに満ちている。

久々にキャンバスに描いてみたらどうだろうかと
思いやってみた。絵はいい感じなんだけど…なんか違う。
なんでだろう。写真だとわかりづらいが、やはりキャンバス
であるという質感や厚みが、この絵の軽さを邪魔しているように
感じる。木はその軽さを許してくれる。
改めて木に描くことの意味を感じさせてくれた。



「陽気」

2025年6月
F15号キャンバスに
油彩、アクリル
パステル、ペン、クレパス

「そとぼりを埋める」



2025年6月
390×260の板に
ペン、クレパス

絵を描くことで外堀を埋めていき、
自分の輪郭を確かめていくことで
生きているという実感を得る。



2025年6月
390×260の板に
ペン、クレパス

絵を描くことで、自分の内側を満たしていく。
世界を見る目を研ぎ澄ましていく。



「コロシウム」

2025年5月
293×295の板に
クレパス

上手いかなかったから
捨てようと思ったが、どうせ
だったらぶっ壊してから
にしようと思って色々
やったら、結構オシャレ
な感じに仕上がって
今ではお気に入りの。



行き詰ったら
ぶっ壊す。
するとひらける。

「青タイル」

2025年7月
293×295の板に
クレパス、ペン
アクリル





「ハート
発見隊」
2025年6月
280×300の板に
クレパス

「風景」
2025年7月
300×305の板に
木炭、クレパス





「人の流れ」

2025年7月
910×817の板に
油彩塗料、クレパス

駅の近くはいつも人が多い。
そしてみんな忙しない。
生き物は自然と共に生きている。
だけどここはそこから遠く離れてしまっている。
悲しいことだけど、現代に生きるってことは
そういうことなんだろう。
だからこそ生きづらさを感じる人が多いんだと思う。
今の世の中は人の生き方というのが限定され過ぎていて、
そこからはみ出すと孤立して生きづらくなるし、
生活も苦しくなる。
人の一生は100年も無いんだから、
もっと色んな生き方があった方が楽しいのに。



支持体の形を自由に
変えられるのが、木のいい所。
細い板だったので、
柱に描いているような
感覚で新鮮だった。

「翔」

1000×180の板に
クレパス、木炭、アクリル

「まちあわせ」

2025年7月
310×285の板に
油彩、ジェッツ、クレパス



「猫」

2025年7月
285×308の板に
油彩、アクリル
クレパス

絵を身近なものに

キャンバスは、一般の人がみた時にアート寄りに感じてしまう要因になり、絵と距離が生まれてしまうと考えている。なので、より身近な木やダンボール、紙だったり、壁や柱といった街中にあるものなどに描くことでより親しみやすいものになってくれたらいいなと思っている。

今の世の中は人が多すぎて窮屈だ。

それなのに人々の繋がりは薄い。

それに、人の存在が強すぎて他の生命の存在感が薄れていて、地球に生きる生命の一体感みたいなのが無い。だから孤独や生きづらさを感じる人が増えているのではないか。

私はそこに絵という世界を繋げたい。

絵という新しい景色を生活の中に取り入れて、

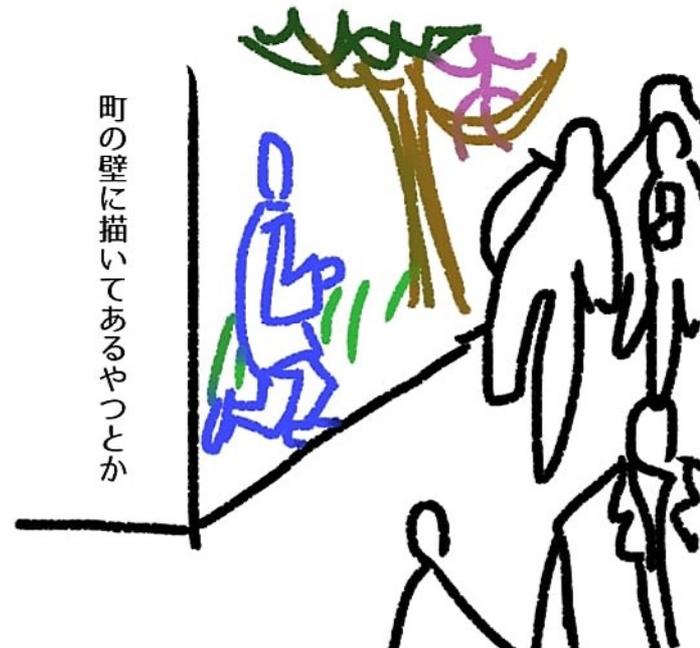
一体感や、楽しさ、心のゆとり

生きる活力といったものを与えられるようになりたい。

こういう
何気ないものが
好き



柱に描いてあるやつとか



町の壁に描いてあるやつとか

漫画

私は漫画を読むのも描くのも好きだ。
絵がたくさん見れるし、本屋に行けばどこでも買える。
家に置いておいて、いつでも見返せる。
外に持って行って読む事もできる。そして安価。
漫画の持つこの性質はとてもよい。
人々の身近に絵があり、楽しませることが出来る。
漫画という文化は、江戸時代の浮世絵から
地続きで来ていると思っている。
出版元と編集者がいて、絵師がいるというスタイルは全く一緒だ。
そして、そういう文化が人々の娯楽であるというのが
今も昔も変わらないのが私は嬉しい。
漫画制作は、作品作りと並行してこれからもやっていきたい。

「襲来！」



男の前に現れたのは、男と瓜二つに変装した宇宙人！
なぜか狙われ、逃げる男。
なんやかんやあって宇宙人達の船に連れてかれるが、
そこで待ち受けているものとは…
という感じのストーリー



ページ一部抜粋



ドローイングとタブローの間

私はドローイングとタブローの間が好きだ。
視覚的な分かりやすさと、感覚的な心地よさが混じり合っていて、見ていて楽しい。

だからドローイングも作品たりえると私は思っているので、
普段描いている時もその境の意識がない。

が、この「間」というものは非常に難しい。
狙って出せるものではない。

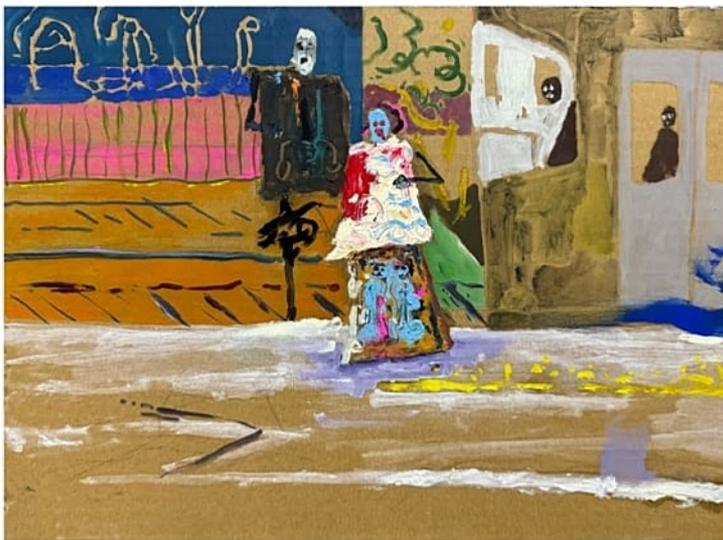
大切なのは、両方の感覚を持つておくということ。

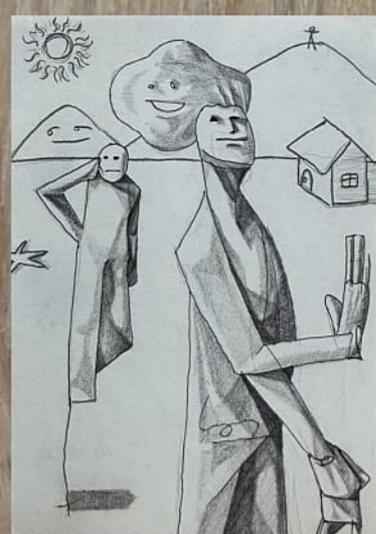
しっかり描写する。思いっきり力を抜いて描く。
この2つを行き来することで、
「間」を保つことが出来るのではないかと思っている。

ドローイング

ドローイングにこそ真の良さが詰まっていると思う。
肩に力が入っていないから、その人の素が1番見えてくる。

私は常にドローイングをする感覚で作品作りをしているので、これが私のドローイングだ
みたいなものが自分の中であまりない。
私が1番肩の力を抜いて描けるなと思うのは、
メモ帳とか紙とか
ダンボールとかに描いている時だと感じるので、
ここにはそういうものを載せていく。









S8

CARAVAGGIO

F6



100% 48000



F8



100% 48000



貝殻は自然の芸術作品



「クモガイ」

2023年6月
画用紙に色鉛筆

自然が生み出す形というのは何故こんなにも美しいのか。特に貝殻というのは、数学的にも美しい螺旋でできている。まさに神の御業だ。芸術というのは自然の中で既に完成されているものだったのだ。こんなものが海岸に行けばゴロゴロとあるなんてなんて素晴らしいんだろうか。似ているようでも一つ一つ色や形が違って個性に溢れている。これを拾わずにいることなんて私には出来ない。

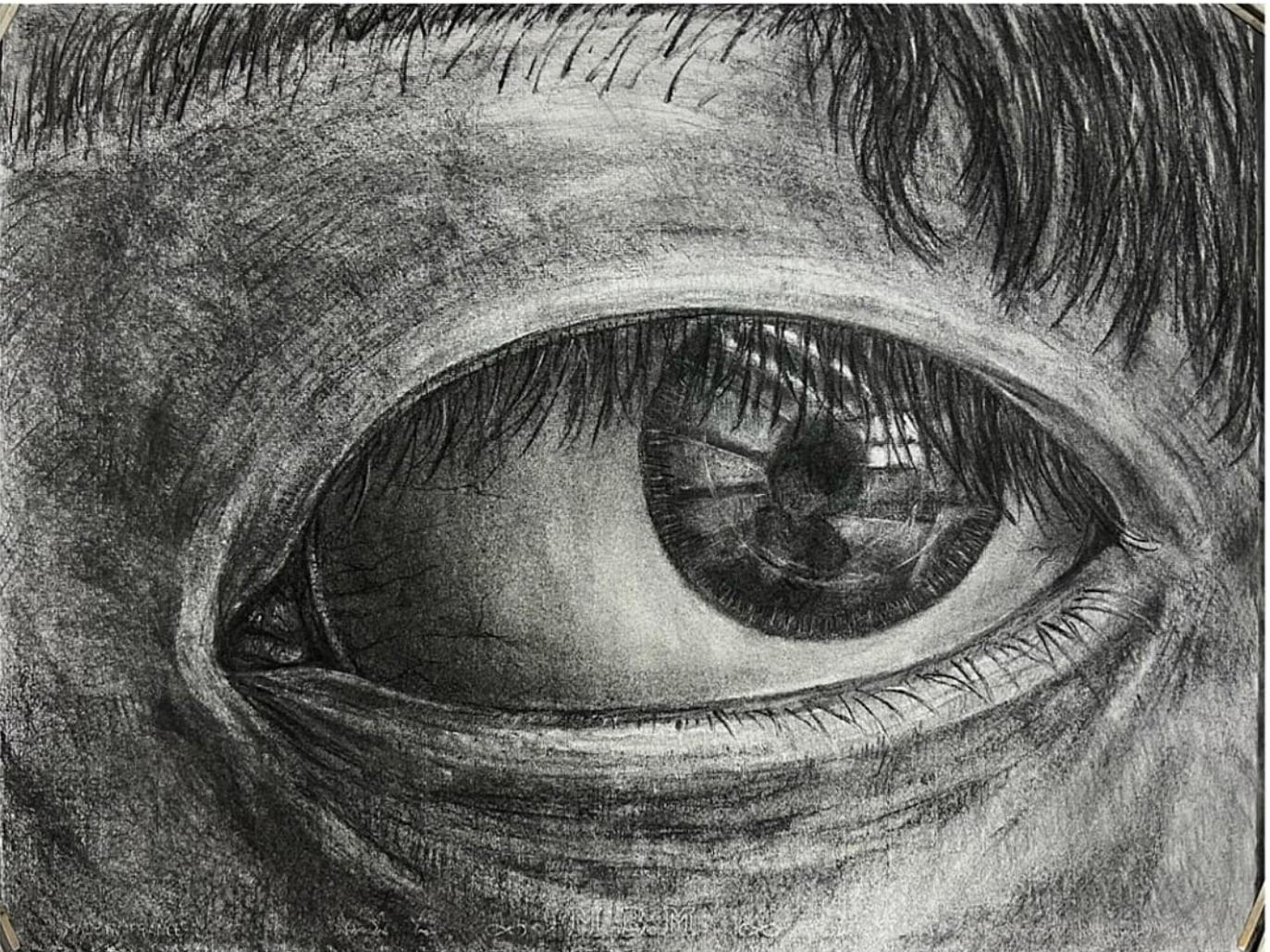
木炭画

予備校時代に描いた木炭は
描写に力を入れてみたり、
イメージに振り切ってみたりと、
作品によってけっこう幅がある。



「ふたり」

2022年11月
木炭紙大
サイズ

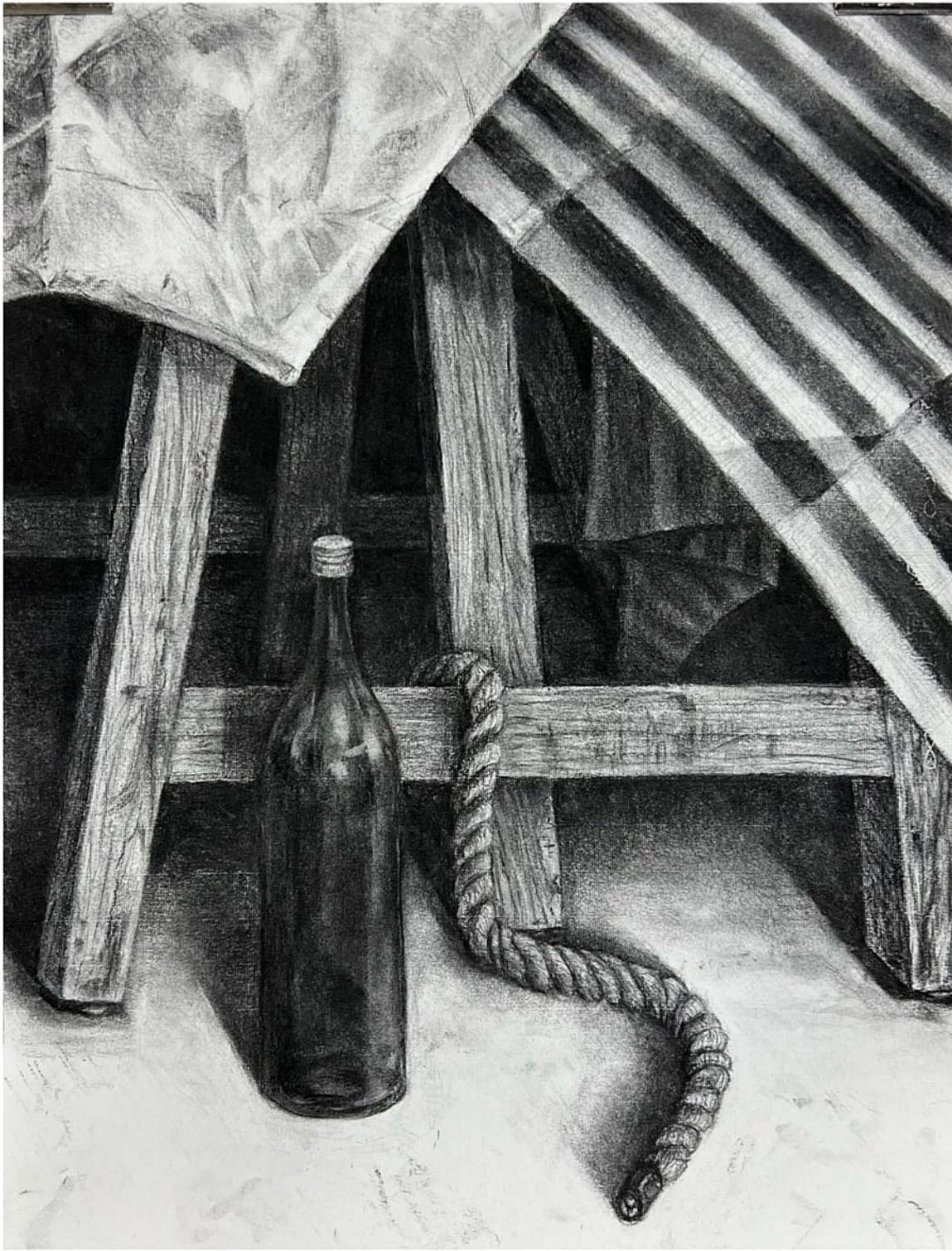


「見る目」

2023年1月
木炭紙大
サイズ

「静物デッサン」

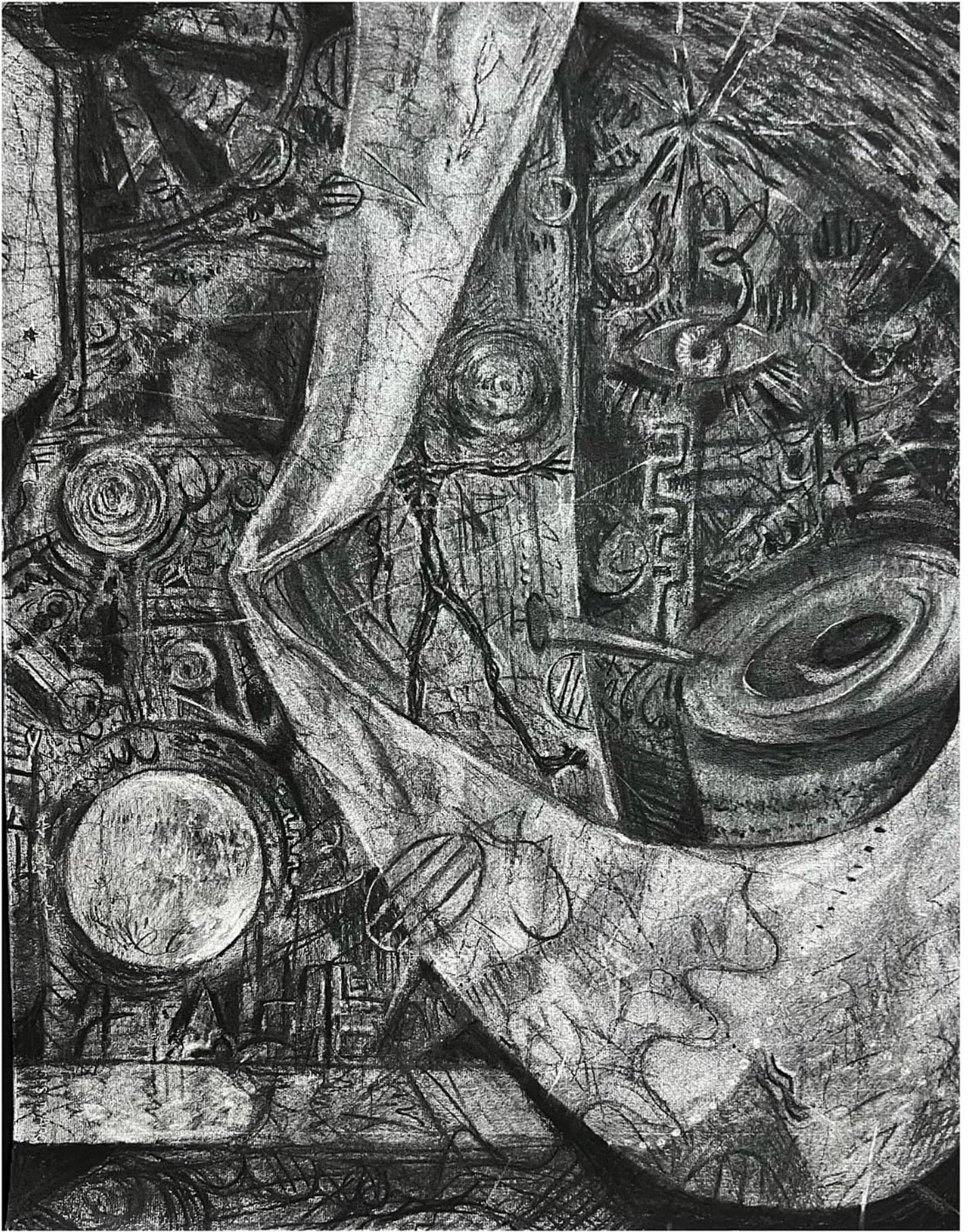
2023年4月
木炭紙大サイズ



「静物デッサン糸」

2023年4月
210×315の木炭紙に
木炭





「トイレットペーパー」

2023年6月
木炭紙大サイズ



「ボン」

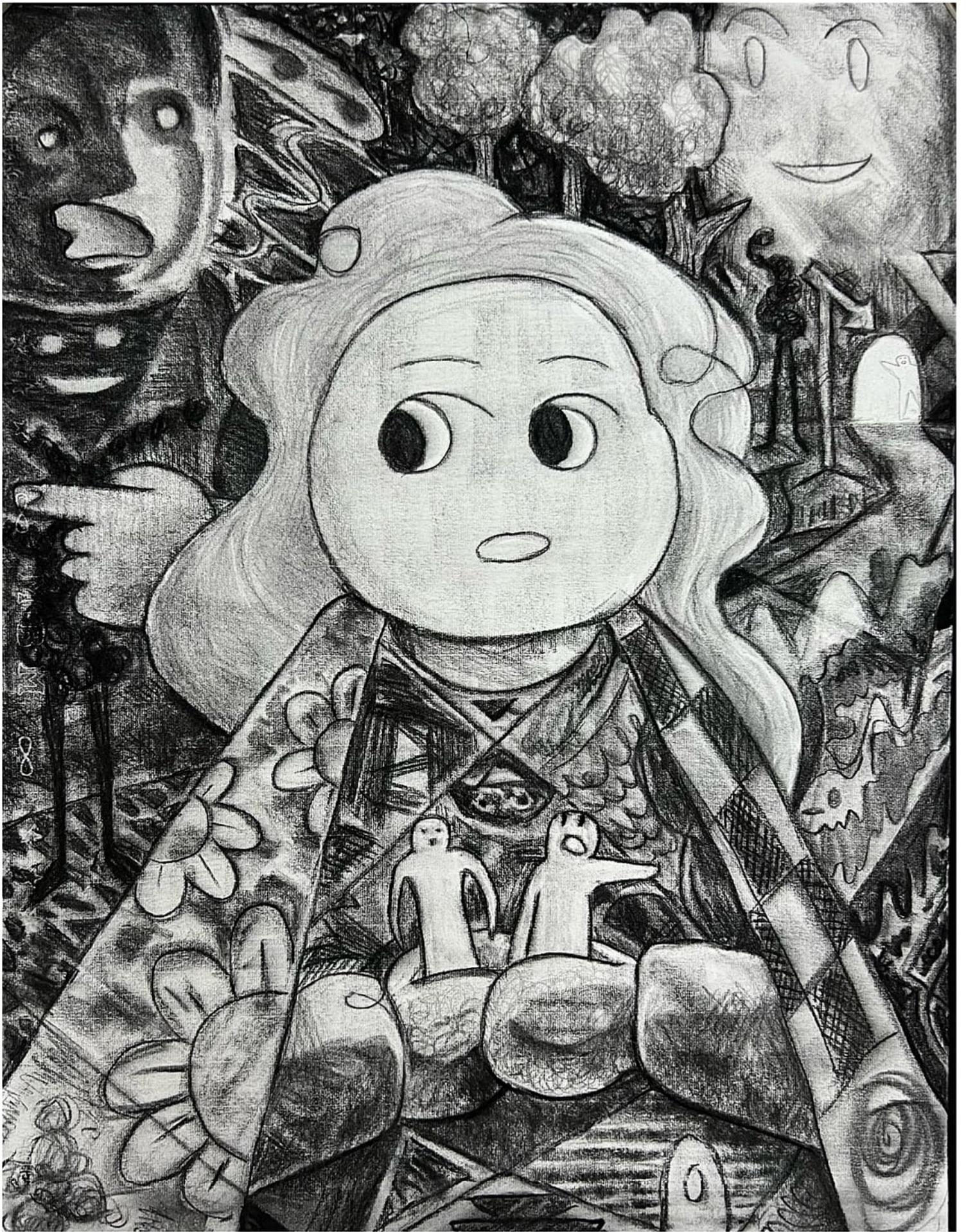
2023年8月
木炭紙大
サイズ

シンプル
だからこそ
伝わる
エネルギーや
ユーモアが
ある

「落石 注意」

2023年9月
木炭紙大
サイズ



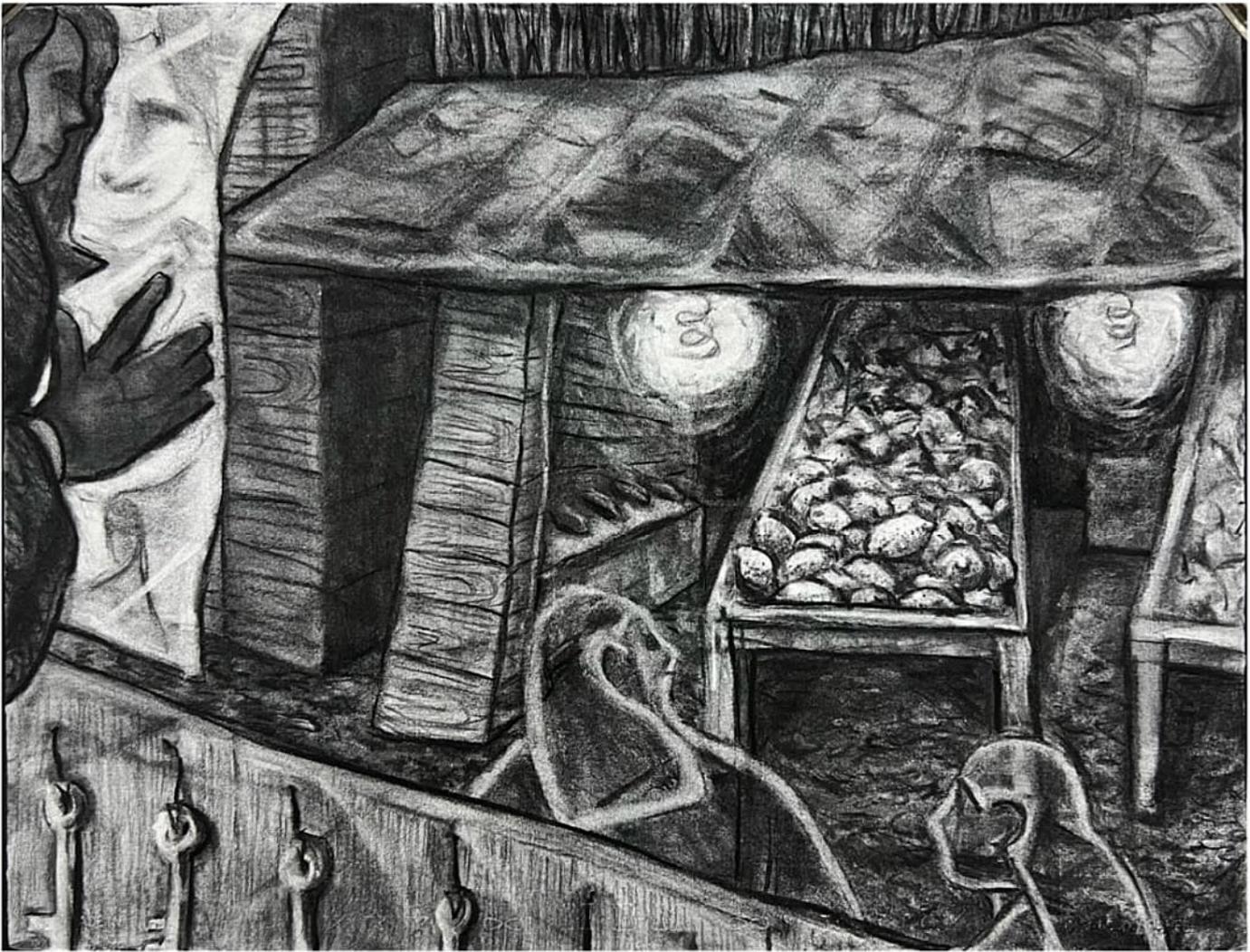


「ゆくさき」

2023年10月
木炭紙大サイズ

「檸檬」

2023年11月
木炭紙大
サイズ



小説「檸檬」
からの
着想を得て
描いた。

「静物」

2023年12月
木炭紙大
サイズ





「どしん」

2024年1月
木炭紙大サイズ



「だっ」
2024年2月
木炭紙大サイズ



「静物擬人化」

2024年9月
木炭紙大サイズ

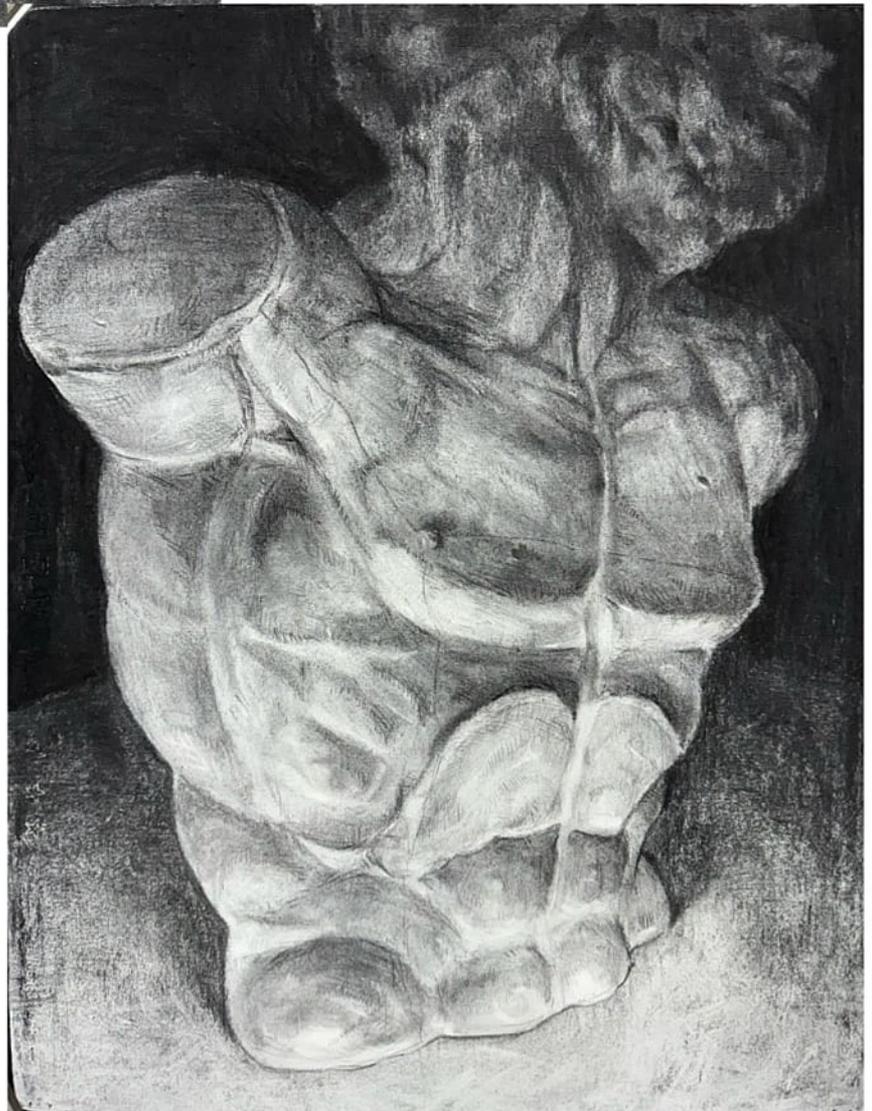
「石膏デッサン」

2024年9月
木炭紙大サイズ



「石膏デッサン2」

2024年10月
木炭紙大サイズ





「またね！」

2024年11月
木炭紙大サイズ

「かいじゅうたちのいるところ」という絵本から着想を得て描いた作品。
かいじゅうたちは、男の子が帰るのを寂しがっている。



「剥製」

2025年1時
木炭紙大サイズ